

今回の研修では、「訪問を継続していくことによって、藤里町民やわたしにどのような変化があったか」「藤里町社協の取り組みによって、どのような派生効果があるか」の二点に注目して活動を行った。

一、訪問を継続していくことによって、藤里町民やわたしにどのような変化があったか

秋田県藤里町は少子高齢化と人口減少が続く、山間の小さな町である。一年次の訪問では三十パーセントだった高齢化率は、人口三千六百人に対して、今や四十二パーセントとなり、道行く人はたいていが高齢者である。

藤里町には一年生の冬、二年生の冬、三年生の夏、四年生の夏と、継続して訪問を行っているが、秋田の方言は難しく、返事を濁してしまうと、「わたしは言葉が汚い（標準語は話せない）から」「わたしが言っていることなんて、わからないでしょう。」と少々悲しそうに尋ね、黙り込んでしまう高齢者が多かった。そうはいつでも、なかには「わからないでしょう。」と言いながらも、「これは標準語でいうと〇〇よ。」「ごまちゃんの子ね！あなたわかるわよ！」と笑いながら、楽しそうに会話を続けようとする方も、訪問を重ねる毎に増えつつあり、人に受け入れられること、相手にしてもらえることがいかに幸せか、今強く感じている。

この地域で何を行うにも、全て社協の職員が間に立って、話を通してくださるため、地域住民から拒否を受けることは少なくなった。これは何年にも亘る活動の継続の成果のみならず、地域住民の社協に対する信頼関係がもたらした恩恵であるとも言える。

福祉の先進的地域である藤里町は高齢者、障がい者、と縦割りの福祉政策だけではなく、様々な分野の、様々な事情を持つ人が集まって活動することによって表れる、相乗効果に期待しているように思える。

たとえば、ひきこもり支援の拠点である「こみっと」（就労施設）では、長い間ひきこもっていた若者と、一般のハローワークから来た中年女性が一緒になって、介護職員初任者研修を受講している。そこではひきこもっていたことは関係なく、一人の人間として扱われ、グループワーク等をこなしていく。すると、今まで苦手意識があったこと（グループ内の発表者等）も回を重ねるごとに上手くなり、成功体験として自信につながっていくという。

この事例から、わたしは一人ひとりの能力に注目することはもちろん、一見異質なものをこそ掛け合わせてみる（挑戦する）ことで、今までは期待できなかった効果を生み出すことも可能であることを知り、支援を行う人もまた、この効果を受けることができる考えた。

二、藤里町社協の取り組みによって、どのような派生効果があるか

生活困窮者保護事業や介護保険、児童福祉が平成二十七年度四月から変化する中で、藤里町社協では、若者のひきこもり支援（就労の場づくり、あっせん等）に力を入れており、

モデル事業として各地から視察が来るまでになっている。

この引きこもり支援等について町の高齢者に聞いてみると、「(この辺は仕事がないから)若い人が働く場ができて、いいと思う。」「町が注目されるようになった。」「(自分の)外出機会が増えた。」などのプラスな意見がある一方、「(自分があまり利用しないので)何も感じない。」「社協さんにはお世話になっているけれど、そのことに関して特に変わったことはない。」などの無関心とも取れる意見もあった。

社協は従来のもちづくりに対して、新しく提言(外部へ情報発信)していく必要がある一方、全ての住民に対して、町の人的、社会資源を最大限に活かしたまちづくりを推進し、一人ひとりに合う形を見出す必要があると考えた。

たとえば、社協がセッティングした「出張!源さんクラブ」(介護予防の企画)では、参加者と学生、「こみっと」の職員と一緒にそば打ちを体験した。参加者は独居高齢者も多いため、他世代・他地域出身者との交流は良い刺激になったようだった。

ただ、どの世代にも社交的な人、大人数での交流は苦手な人はおり、それを強要するのは苦痛になりかねない。そのため、どんなにお互いが頑張っても会話ができずに、結果的に孤立してしまう人はいた。しかし、それ自体悪いことではないのかもしれない。その人が「不得意」なだけで、その「不得意」なことを無理に変えようとするのは、とてもおこがましいことに思えた。もし相手に変わりたいという思いがあるならば、とことん付き合うのも良いし、別の角度(場面)から相手を見ることで、相手がイキイキとできる居場所を見出させる可能性もある。どんなに年をとっても、様々な可能性にかけて、相手の居心地の良い(生きやすい)場所を考慮する必要があると感じた。

わたしは今までの実習などの経験から、同じ目的・問題意識を持つ人たちのために「場」をセッティングすること(もしくはその支援)や、その「場」から生まれる別の効果を期待することに、活動の意義があると考えている。

上記に示した事例では、そば打ち体験が終わったあと、自然発生的に翌月に行われる「老人大会」の練習が始まっていた。近くにいた方にお話を伺うと、「老人大会では結婚〇周年のお祝いや各老人クラブがステージで踊りを披露することになっていて、(お話を伺った方は)かれこれ八年目になる。」とのことで、リーダー格の女性に加え、直前のそば打ちでは端のほうで小さくなっていった女性も中心に立って、仲間に踊りを教えていた。

それまでのよろよろした不安げな表情の老人のイメージが嘘のように変わり、とてもイキイキと動き、明るく笑うこの女性を見て、「場」づくりはその派生効果も含めて成功といえるのだと確信した。

藤里町には「浅間神社祭典・藤琴駒踊り」という秋田県無形文化財民俗芸能に指定された祭りがあり、この時期になると地域にいる子どもや若者はもちろん、藤里町から出ていった若者たちも戻ってきて、夜の練習に励んでいる。この活動で注目すべきところは、祭りの時期よりも前から地元に戻ってきて、練習に参加していることにある。祭りの時期は、九月初旬でありお盆休みからは外れている。当然学校もあれば、仕事もある時期に、夜は

地元へ帰り、地元の人間と過ごす時間を大切にしている人が多くいることは、当たり前のようであり、とても意味のあることだと思う。このような地域を気遣い、人を大事にする住民が多くいる町だからこそ、様々な社会問題に対峙していける力があるのだと考えた。

### 三、今後に向けて

現在、藤里町社協では新しい局長、新しい体制を敷いて、他地域に先駆けた福祉の実践をしようとしている。社協と住民との信頼関係については上記でも取り上げたが、主催者だけがはりきって事業を進めても、肝心の対象者のためにはならないことは明白である。

それに比べて、わたしの住んでいるまちでは、様々な組織、ヒト、モノがあふれていて、社協の活動の様子が見えづらい。身近な相談者であるはずの民生・児童委員も、藤里町のように、お互いがお互いのためを思って行動できる距離感ではないのが現状である。

超高齢社会で高齢者ばかりに注目してしまうのは仕方のないことではあるし、所属するサークルも高齢者を対象としている。しかし、対象を絞りすぎず、幅広い年齢層の、様々な事情を持つ人間と関わる機会を増やしていくことの方が、これからの時代には意義のある活動になっていくのではないかと、今回の訪問を通して強く感じた。